

学校不適應の児童生徒の支援 ～背景にある発達障害へのアプローチ～

子ども学科 市川 奈緒子
発達・教育相談室 五十嵐 元子
教育・福祉研究センター嘱託研究員 関 暁子

不登校や学内での不適應行動と言われるような状況の背景に、児童生徒の持つ発達障害の傾向が絡むことが多いことが多数報告されるようになってきている（齋藤，2010 等）。今回の研究では、不登校その他の不適應状態に陥っている児童生徒に対して、有効なアセスメントをおこない、その結果を踏まえて主に学習支援という形での支援をおこなった。

<学習支援の様子>

① 小学校3年生の児童 A の場合

本誌別稿で報告

② 中学校1年生の生徒 B の場合

小学校2年生ごろより不登校の傾向のある子どもであった。4年生から6年生まではほぼ完全不登校状態だったが、学生による支援を始めた途端に、中学校の登校を開始した。しかし、いじめなどもあって1学期で再度不登校の状態になった。

アセスメントでは、知的な遅れを持たない生徒であることが確認されたが、各種の学習に大きな遅れを持っており、特有の記憶の困難さを持つことと、不登校の期間が長いための二次障害が大きいことが推測された。

学習が思うようにいかないことによって、傷ついてきた経験の積み重なりにより、少しわからないことがあると、すぐに逃げるという対処方法が身についているところがあったが、支援を繰り返していく中で次第に自分の力を感じられること、支えられながら学習に向かうことができるようになっていった。現在は本児が体調を崩したことにより（精神的な不調の影響と診断されている）支援は中断している。

<まとめ>

不登校の生徒への支援から、次のようなことが明らかとなった。

① 不登校の背景のアセスメントの困難さと支援体制の不十分さ

「不登校」は、日本で最初に問題になったときに「母子の密着，母子分離の失敗」の文脈で解釈されたことが現在もまだ影響しており、不登校の背景にある児童生徒の持つ傾向に気付かれにくく、しかもそれに対する支援体制が整っていない。

② 長期間の不登校による二次障害の大きさ

不登校は、日本で最初に問題になったときに「無理に学校に行かせない」「本人が力をためる時間を確保する」などが言われ、不登校刺激を控え、ただ見守ることが支援とされてきた。しかし、実際には、義務教育の時期に長年不登校であることの負の影響は計り知れない。長年家庭に引きこもっている子どもは、学習ばかりか、対人関係を適切に学ぶ場も持つことができない。

③ 本人にとって適切な学習の仕方の提示と支援者の存在は、大きなエンパワメントになる

④ 学校との速やかな連携の大切さ

不登校の傾向を持つ子どもを支援する学校、教員にも多大な心的物理的負担がかかる。支援者の支援ということももっと考えられてよいのではないか。

今後は、学習支援の実践とともに、現在の不登校を巡る支援体制の問題にもアプローチしていきたい。